

分科会 テーマ 地元の推進体制について

パネリスト

飯田地区：飯田市観光課 小林美智子

南紀・熊野地区（和歌山県）：和歌山県環境生活総務課自然環境室 服部克彦

飯能・名栗地区：財団法人日本生態系協会 城戸基秀

佐世保地区：させばパールシー株式会社 原田誠一郎

コーディネーター：有限会社資源デザイン研究所 海津ゆりえ

飯田地区

- ・ 飯田市は人口 109 千人、面積 565 km²。南アルプスと中央アルプスに抱かれた山都であり、東西の自然・文化・交通が交わり人と人が交わる場所である。
- ・ 飯田市には農村地帯が広がっている。いま、ちょうど紅葉の時期である。
- ・ りんご並木があり、地元の中学生在が収穫をするイベントを実施している。また、人形劇フェスタは 20 年近く続いている。国際的なフェスタとしていまでも活発に活動している。夏に開催されている。
- ・ 寒いところのできる果物も飯田までが限度、あたたかいところのできる果物も飯田までが限度ということで、作物の南北限の地域である。
- ・ 南信州桜守の旅では、見事な桜が南信州いっぱい広がっている。南信州は彼岸桜の宝庫であり、樹齢約 300 年の名桜が 80 本を超えている。普通の桜の見頃時期は 1 週間程度に限られてしまうが、市町村の境界を超えて考えれば、広域と標高差で桜の見頃は、1 週間から 1 ヶ月に拡大できる。桜守というガイドが同行し、名桜の由来、暮らしとの結びつき、樹木意的地などを聞きながら、団体顧客も少人数に分けて案内する。また、夜桜ツアーへの発展により、宿泊獲得戦略も行っている。このような南信州のツアーは、南信州観光公社が地域資源を紹介している。
- ・ 南信州のつよみとして、体験教育旅行などの実績がある、南信州観光公社というプロモーション組織がある、各地域の自治体活動の活発な展開、伊那谷自然友の会（会員 2,200 人）等の自然研究組織の存在、自主自立の気風、があげられる。
- ・ 平成 17 年 3 月に、全国エコツーリズム大会 in 南信州を開催し、12 の分科会を行った。全国エコツーリズム大会の一番のねらいは、「どれだけ自分たちの地域を知ってもらおうか、お互いに知り合うか」である。人を知り、活動を知り、地域を知ってもらおうということをねらいとして開催した。大会後は、分科会を部会に発展させて活動を行っている。
- ・ エコツーリズム推進体制は、南信州観光公社があり、村おこしグループがあり、地区自治会があり、体験プログラムインストラクターの会があり、伊那谷自然友の会のような研究団体があり、美術・博物館や歴史研究所があり、自治体があり、行政

機関があり、それぞれが必要なところは協力しあって自分たちの課題を解決するような仕組みづくり、またそれぞれが活かされる関係をつくっていくのが南信州エコツーリズム推進協議会の役割ではないかと思っている。

- ・ 秋葉街道が活発に動き始めたことをきっかけに、清内路街道も掘り起こしをしようという動きが他の地域から出てきた。
- ・ 自分たちの地域をいかに活かすか、大事にするかということが、エコツーリズムの一番大事なところではないか、そのきっかけや仕組みづくりが協議会の役割ではないかと思っている。
- ・ 南アルプスの麓にある遠山郷という地域では、木造校舎の維持から、ツアーの拠点としての活動を模索し始めた。
- ・ 登山家大蔵喜福氏、飯田山岳会を交えた上村・南信濃地区の山の会との赤石山脈活用の研究会として赤石部会を開催した。
- ・ 重点事業として、街道サミットの開催、南アルプスシンポジウムの開催、認証制度部会のスタート、モニターツアーの実施、環境保全ツアーの実施が今年度後半の予定である。
- ・ エコツーリズムの取り組みは試行錯誤の連続から、ネットワークの必然性と必要性が生まれてきて、地域が少しずつ動き出している。「住民主体で自ら造り出していく」、「プロセスを大切にしたい」ということが南信州エコツーリズム推進協議会の進むべき方向である。

会場

- ・ 飯田地区の桜の見どころを教えてください。

飯田地区

- ・ いまは「マスツーリズム」から「エコツーリズム」へということで、多くの来訪者がいる場所・注目する場所だけでなく、一本の樹木に注目し、大切にしていきたい。

南紀・熊野地区（和歌山県）

- ・ 和歌山県の現状は、和歌山県全域をフィールドとした体験型観光「ほんまもん体験」を実施している。プログラムの特色として、和歌山の自然や日々の暮らしや営みを素材とする、旅行者の五感を使うものであること、旅行者と地域住民のふれあい・交流があることとする。全 286 プログラムのうち、地域内では 76 プログラムある。
- ・ エコツーリズム推進に向けて、南紀地区エコツーリズム推進連絡協議会を設置した。協議会メンバーは、大学教授、ほんまもん体験のコーディネーター、熊野古道の語り部、環境省、和歌山県などで構成されている。和歌山県の南紀熊野地域におけるエコツーリズム推進について検討、和歌山県の南紀熊野地域ならではのエコツーリズムの概念について検討、その概念に沿ったプログラムの検討、県内外への情報発

信を行っている。

- ・和歌山県串本地域は、本州最南端の潮岬を中心とし、リアス式海岸が東西に長く延びる。また奇石、怪石等雄大な自然に恵まれる、黒潮の影響により年間平均 17 と非常に温暖な気候であり、車・バス等による海岸景観の探勝や海水浴・ダイビングなどの利用が中心である。
- ・串本沿岸海域は今年度ラムサール条約重要湿地に登録される。地元でもサンゴを含めた自然環境の価値を認識していない人も多かったが、登録を契機に串本の海を守り、より多くの人にそのすばらしさを知ってもらおうという機運が地元で高まっている。これをきっかけに、今年 6 月、ラムサール条約串本会議を設立した。
- ・ラムサール条約串本会議では、利用と保全推進のための具体的な方策について検討を行う。地元串本町が事務局。構成員は串本町、串本教育委員会、環境省、和歌山県、串本海中公園センター、観光協会、串本漁協、ダイビングショップ関係者である。
- ・平成 17 年 6 月に第 1 回ラムサール条約串本会議、7 月に第 2 回会議、8 月に第 3、4 回会議、10 月にふれあい未来づくりトークが開催され、11 月 23 日には、ラムサール登録記念式典が行われる予定である。
- ・保全と適切な利用に関する課題では、「海中」の自然資源であるサンゴ群落の価値を、内外にどう広く浸透されていくのか、サンゴ群落を含めた海域生態系を保全していくための体制と資金の問題、地元において自然環境の保全と、その適正な利用を主導する人材の育成、がある。
- ・広く浸透させるための取り組みでは、パンフレット、ダイビング専門誌との連携により、多くの人に実際に PR する。また、県外・地元に向けたモニターツアーの実施などにより、多くの人に実際に海中に自然景観を体験してもらうことが必要である。
- ・オニヒトデによるサンゴの食害は、場所によっては 39%の被害がある。平成 16 年度から平成 17 年 6 月末までに、延べ 511 人のボランティアが参加し約 46,800 匹を駆除した。引き続き官民協働で駆除に取り組む。
- ・一過性のイベントで終わらず、学校との連携を図り、来年度は小中学校生向けの環境副読本、小中学生のスノーケル体験事業、修学旅行の受け入れ、今年度は教師を対象としてラムサール講習会を開催など自然環境保全の意識の普及を図る。
- ・那智勝浦町・宇久井半島は、吉野熊野国立公園の海岸部の中央部にある太平洋に面した常緑樹林の半島である。南方系の植物や昆虫も見られるほか、野鳥も多く、また、昔、漁から帰ってくる船の状況を村に知らせる監視所跡や点在する畑などがある。
- ・宇久井半島を豊かな自然と人のふれあいの場にしようという地元の熱意により、宇久井海と森の自然塾運営協議会が設立した。設立の経緯は、平成 13 年度環境省主

催のワークショップ形式で計画を検討、平成 14 年度環境省が宇久井地区整備基本計画を策定、平成 15 年度「宇久井地区管理運営協議会準備会」設立、平成 16 年度に「宇久井海と森の自然塾運営協議会」を設立した。構成メンバーは環境省、和歌山県、那智勝浦町、小・中学校、漁業関係者、地元 NPO などである。平成 17 年度は、会則を変更、会員を募集。拠点施設となる「宇久井自然体験ハウス（仮称）」の建設が始まる。

- ・ これまでの取り組みでは、資源の調査、観察会の開催、遊歩道の整備、インタープリター養成講座、エコツーリズム研修会、子どもパークレンジャーが行われてきた。
- ・ プログラムの企画、ボランティアの参加・育成、広報などの取り組みがまだまだこれからである。また、資金面の問題がある。課題に対する取り組みとして、先進地視察や研修による人材養成、遊歩道の整備・清掃活動や自然体験ハウスの展示協力・作成による環境整備、観察会の開催によるプログラムの実施など、まずは活動内容の充実を中心に取り組む。
- ・ エコツーリズム推進連絡協議会とそれぞれの推進組織の連携を深め、和歌山県の南紀熊野地域ならではのエコツーリズムの概念に沿った取り組みを推進していく。

会場

- ・ 南紀・熊野として、エコツーリズムにどのように取り組んでいくのか。

南紀・熊野地区（和歌山県）

- ・ 熊野古道では、健康のために歩こうというイベントを実施したり、語り部の会も町単位で実施している。協議会とそれぞれの推進組織の連携を取っていきたい。

飯能・名栗地区

- ・ 飯能・名栗地区の基本方針は 飯能名栗の自然や文化を保全・再生して将来へ伝える、訪れるたびに新たな発見や変化のある楽しく満足できる旅を提供する、すべての地域と人の参加により、地域への誇りと愛着を育み、地域の人々の個性を輝かせる。これより、市民への普及啓発・参加機会の充実、推進体制の確立を図る。
- ・ 推進体制は、エコツーリズム推進協議会、飯能名栗エコツーリズムオープンカレッジ、活動市民の会、地元自治会などへの説明(公民館での講座・団体への説明など)、パイロットツアー・モデルツアーである。
- ・ エコツーリズム推進協議会では、自治体・商店街・商工会・青年会議所・民宿・きまま工房木楽里・環境団体など多様なメンバーが推進の主体になっている。
- ・ エコツーリズムオープンカレッジでは、エコツーリズムの理解、エコツアー実施主体の育成を行っている。
- ・ 活動市民の会では市民による自主的な活動組織、参加希望者の受け皿である。
- ・ 地元自治体などへの説明では公民館での講座・団体への説明などを行っている。
- ・ 飯能名栗エコツーリズム推進協議会から活動市民の会へは、情報提供(会報発行)

参加協力の依頼、エコツアー実施の支援を行っており、活動市民の会から推進協議会へは、推進協議会への提案、推進協議会の傍聴やオブザーバー参加、実施するエコツアーの報告を行っている。また、活動市民の会からオープンカレッジに参加でき、オープンカレッジから活動市民の会へ登録することができる。推進協議会は、オープンカレッジへ講師の派遣をして、オープンカレッジから報告を受けるシステムとなっている。

- ・パイロットツアーは、地元の再発見をしようということで、地元の人たちが自分の地元をみてまわる。まずは地元が主体となって企画・実施する。(例えば、カヌー工房では野草を食べたり、廃油を使って石鹸などをつくっている。また、子供たちに間伐体験してもらおう。)パイロットツアーに関わる人々は、自治組織(地域住民)・自然保護団体・林業関係者・観光協会・宿泊施設経営者・体験工房・歴史文化研究者・伝統文化の継承者・地域の食文化の会・農業関係者などである。
- ・エコツアーの事前協議制度は多様な主体による、多様な形態のツアーより、エコツアーリズムの基本的な考え方から逸脱しないように内容のチェックを行う。
- ・推進体制確立に向けた課題は、センター機能を持つ組織の設置、ツアー実施者の広がり、地元自治体への広がり(自治会の取り組み)、市民活動促進の仕組みづくり、である。

会場

- ・(パイロットツアーなど)すべてボランティアでやっているのか。

飯能・名栗地区

- ・ボランティアである。行政から補助制度はあるため、トランシーバーなどの準備はそれで行った。

佐世保地区

- ・佐世保地区は九州北西部に位置しており人口約25万人である。平成18年3月には小佐々町・宇久町と合併予定である。佐世保地区では年間430万人の来訪者を迎えている。近年では、“残された自然・西海国立公園九十九島”や“蘇った自然・ハウステンボス”などを中心とした観光都市のイメージが定着しつつある。人工の7割が第三次産業に携わっている。
- ・佐世保地区の魅力について整理すると、佐世保は市街地を中心として、その周辺には深い入り江を活かした港や造船施設などがあり、西部には入り組んだ地形(リアス式海岸)が特徴的な九十九島、北部には佐々川や相浦川に沿って発達した歴史の跡がみられる洞窟や遺跡、さらに、国見山の豊かな水源を活かした水田や農地が広がり、東部には400年の歴史をもつ三川内焼の窯元が点在し、南部には環境に配慮して新しい歴史を刻み始めたハウステンボスのほか、海と山が隣接した地形を活かした農園が広がっている。また、土地柄を活かした食文化として、佐世保バーガー・

九十九島カキ・世知原茶などが有名であり、港町グルメ・海の幸・山の幸を幅広く楽しむことができる。

- ・ 佐世保地区はバラエティに富んだ資源が魅力であり特徴といえるが、一方でこの地区全体のイメージが分散してしまうことも考えられ、その意味でも、各地域の連携と関係団体の協力は不可欠であり、一定の方向性をもって、エコツーリズムを推進していく必要がある。
- ・ エコツーリズム推進の第一歩として、平成 16 年 12 月、観光事業者関係者・有識者・行政などを中心として、「佐世保市エコツーリズム推進検討会」を立ち上げ、佐世保型エコツーリズムの理念・テーマ・目標など大枠の方向性を示すための基本方針を作成した。今後は「佐世保市エコツーリズム推進検討会」を移行・拡大し「佐世保地区エコツーリズム推進協議会」を立ち上げ、地域住民代表者・ガイド・地域情報誌関係者などの意見を取り入れ、基本方針を踏まえた、より具体的な目標や方策などの内容を深めた基本計画を作成する予定である。将来像（実施体制）は、エコツーリズム関係者協議会およびランドオペレーター（受皿組織）を構築していく必要がある。また、佐世保市エコツーリズム推進室とモデル事業支援機関であるさせばパール・シー株式会社が連携し、参画・各種支援や事務局の運営支援を行う。
- ・ 佐世保市エコツーリズム推進検討会のこれまでの経緯は、平成 16 年 12 月 17 日「第 1 回佐世保市エコツーリズム推進検討会」、平成 17 年 2 月 15 日「第 2 回佐世保市エコツーリズム推進検討会」、5 月 17 日「第 3 回佐世保市エコツーリズム推進検討会」、7 月 20 日「第 4 回佐世保市エコツーリズム推進検討会」、10 月 13 日「第 5 回佐世保市エコツーリズム推進検討会」を開催した。第 5 回の検討会において「基本方針」の作成を完了した。その他、平成 16 年 12 月 18 日「九十九島にてカヤックを体験」、平成 17 年 2 月 4 日「阿蘇にて研修」、2 月 5 日「小国にて研修」、2 月 15 日「ハウステンボスにて環境学習施設を体験」などを行った。
- ・ 推進協議会の役割は、佐世保型エコツーリズムの具体的な目標や方策等を協議する、基本方針を踏まえ、より具体的な目標や方策等を示すための「基本計画（全体の基本構想）」を作成する、実施段階においてアドバイザー的な役割をする。今後のスケジュール（案）は、平成 17 年 11 月中旬「設立準備会」および「第 1 回佐世保地区エコツーリズム推進協議会」開催、平成 17 年 12 月中旬「基本計画検討部会」開催、平成 18 年 1 月中旬「第 2 回佐世保地区エコツーリズム推進協議会」開催、平成 18 年 2 月中旬「基本計画検討部会」開催、平成 18 年 3 月中旬「第 3 回佐世保地区エコツーリズム推進協議会」開催の予定である。また、第 3 回協議会において「基本計画」の作成を完了する予定である。
- ・ 各実施団体・実施者の役割は、佐世保型エコツーリズムの実現、基本方針・基本計画を踏まえ、実際に事業を実施するための年度計画および運用計画等、詳細を示すための「実施計画」を作成して実施する。持続可能な取り組みにするためには、

各実施団体・実施者を取りまとめる組織が必要である。しかし、佐世保地区を総合的にマネジメントする既存の組織がない。組織の研究は今後の課題である。

- ・ 平成 17 年 11 月 27 日に市民対象のモニターツアーとして開催予定の「佐世保のエコツーリズムを体感しよう！」では、一次産業やまちづくりに携わる団体や個人に協力を求め、実施事例をつくとともに、市民に佐世保の魅力について感じてもらうことを目的としている。また、平成 17 年 6 月から平成 18 年 3 月まで、西海国立公園九十九島に関する正しい理解の促進、西海国立公園九十九島への関心度向上、西海国立公園九十九島の知名度向上などを目的として、市民対象の講座を年間 9 講座設定した。

コーディネーター

- ・ 各地区の推進体制についてまとめると、飯田型（飯田地区）は、推進組織として「南信州エコツーリズム推進協議会」があり、実施部隊として研究委員会（自治会・地域おこし（地域部会））がある。また、南信州観光公社という既存のプロモーション組織がある。和歌山型（南紀・熊野地区）は、推進組織として「南紀地区エコツーリズム推進連絡協議会」が設置されており、そのほか、「ラムサール条約串本会議」や「宇久井海と森の自然塾運営協議会」など地域での関連する主な推進組織がある。飯能型（飯能・名栗地区）は、「エコツーリズム推進協議会」が推進の主体である。実施部隊として、「オープンカレッジ」や「活動市民の会」がある。そのほか、飯能市エコツーリズム推進室がある。佐世保型（佐世保地区）の推進組織は、佐世保市エコツーリズム推進検討会で「基本方針」を作成し、佐世保地区エコツーリズム推進協議会で「基本計画」を作成する。実施部隊として各実施団体（エコツアー事業者、町内会、観光施設、宿泊施設、交通機関など）があげられる。各実施団体・実施者をまとめる組織（地区別運営組織およびランドオペレーター）が必要である。そのほか、佐世保市エコツーリズム推進室がある。